

蒼と雲の 彼方で



表紙イラストりまっち

悠川 白水

蒼と雲の彼方で

悠^は川^る
川^{かわ}

白^は水^{くすい}

目次

戦火の夏

素子との夏

蒼と雲の彼方で

敢えて言うなら新装版のあとがきっぽい

表紙イラスト・まっち

戦火の夏

3

操縦桿そうじゅうかんとフットバーを操ることとで生み出される、強烈な横方向の加速度に、颯太そうたは全身に力を込めて耐えていた。

そして、つい一瞬まで自分のいた空間には、おびただしい数の十二・七ミリ機銃弾きじゅうだんが降り注ぐ。

「しぶといジャップ、しかしケツについたぞ、どうだケツにつかれた気分は……思い知らせてやる！」

闘志とうし十分のマスターングの計器の横には、婚約者であろうか、若くて綺麗な白人女性の白黒写真が留められている。

「くっ……」

そのようなことは露程つゆほども知らない颯太そうたは、歯ぎしりしながら苦悶もんの声を漏らす。手練てだれのマスターング二機に、後ろを取られてし

まってからしばらく経つ。颯太そうたが操るのは、基礎性能ではマスタングとほぼ互角の四式戦よんしきせん。公認撃墜十二機、航空隊の準エース格である颯太そうたのこと、普段なら容易に後ろを取られたりはしないのだが、いかんせん今日ばかりは相手の数が多すぎる。

周囲を見る余裕はとてもないが、空襲を受けて雲量二うんりょうの澄んだ空に大慌てで駆け上がった友軍機ゆうぐんは、優に五倍は超えると思われ、数の米軍戦闘機隊べいぐんと、激しい空戦を繰り広げているはずだった。至近距離での乱戦らんせんとなっているため、お互いに編隊空戦ではなく格闘戦となっている。

対米戦争べいが始まってから、四度目の真夏を迎えていた。上空からの日差しはどこまでも強い。四式戦よんしきせんを巧みに横滑りよこすべさせて、相手の機銃弾きじゅうだんをかわしながら反撃の機会をうかがう。下手に機体をひるがえ翻すとそのまま狙い撃ちされてしまうのだ。

「いざ尋常^{じんじょう}に勝負、いくぞ」

「真珠湾^{パール・ハーバー}の戦友の分だ、叩き落としてやる！」

意を決した声が、聞こえるはずもない互いの操縦席^{そうじゅうせき}にこだまする。

ほんの一瞬、相手の動きの針の糸のような呼吸と集中の隙を見逃さなかった颯太^{そうた}は、操縦桿^{そうじゅうかん}をいっぱいに操り、最大戦速で機体を高速で翻^{ひるがえ}して相手の後ろへと回り込もうとする。いわゆる捻^{ひね}り込み機動だ。

「ぐううう……」

捻^{ひね}り込みは、機体と身体^{からだ}にかかる負担が尋常^{じんじょう}ではない。しかも、この四式戦^{よんしきせん}は操縦桿^{そうじゅうかん}が異様に重く、捻^{ひね}り込み機動が簡単にできないように設計されているため、捻^{ひね}り込みを決めるのはほぼ神業^{かみわざ}といっている。空の水色しか映っていないはずの景色が、ぐるりと

かき混ぜるように激しく動いているような感覚が颯太を襲う。

「ワツツ!？」

マスタングの視界からは、一瞬で四式戦の姿はかき消えて。

そして捻り込み機動を辛うじて決めた颯太の視界は、二機の銀翼きらめくマスタングを後ろ斜め上から見下ろす格好で捉えていた。

好機は一秒が長すぎるほどの一瞬。翼内の二十ミリ機銃弾を一気に叩き込むと、左の一機は右翼から、右の一機は左翼から火を噴く。同時に颯太の四式戦はその上を駆け抜けていった。

「よし！」

翼から炎に包まれて墜落してゆくマスタングを見下ろしながら、気合いとともに颯太はそのまま上へと機体を駆け上がらせる。

颯太は、幼少より古流剣術を鍛錬してきた生粋の剣士だ。鍛え

た剣技も戦闘機に乗ってはものの役に立たないと思いきや、空戦でも立ち会いのような絶妙な呼吸というか、研ぎ澄まされた剣客としての感覚的なものが、幾度となく颯太を救ってきた。

激しく呼吸をしながら、颯太は次なる敵を求めようと大きく左右を向く。とにかく劣勢なので、一機でも多く敵機を打ち落とさなければいけない。

度重なる空戦で既に高度は七千メートルを超えていたが、しかしその動作で酸素吸入マスクが外れてしまった。

「……っ!？」

颯太が、酸素吸入マスクをつけていないことに気づいたときにはもう手遅れ。極度の酸欠で颯太の意識は急激に薄れていき……そして、気を失った。

ガクン、と四式戦は機首を下げたかと思うと、そのまま海面へ

と向けて落下を開始する。

——ソータさん……ソータさん！

失われた意識の中。颯太は操縦桿を固く握ったままの両手を揺さぶられるような、そして忘れかけていたような遠い記憶の、とても懐かしい声を聞いたような気がした。

「……素子？」

目を開いた颯太の眼前には、空の青とは似て非なる、濃厚な蒼が一面に広がっていた。

「なんっ……」

何が起こっているのか瞬時には理解しかねた颯太だが、次の瞬間には眼前に広がっているのが海であることは理解できた。

「うおおおっ」

颯太は操縦桿を力一杯に引き上げる。何としても機首を起こさ

なければ海面へと墜落^{つらいらく}してしまおう。この速度で海に墜落^{つらいらく}すれば、まず助からない。

ばしゅううう……

海水が翼を大きく叩く。

辛うじて海面ギリギリで機首を起こした四式戦^{よんしきせん}は、波飛沫^{なみしぶき}に翼を洗われつつ海面から急激に上昇を開始した。

まだ顔が青ざめているのが、自分でも分かる。

九死に一生を得た颯太^{そうた}は、航空隊の基地へと戻ってきた。まだ空戦は続いているが、機関砲弾を大きく消耗していたのと、度重^{たびかさ}なる捻^{ひね}り込み機動など全力運転を繰り返したため、燃料が心許^{こころもと}なくなっていたためだ。

緊急発進^{きんきゅうはっしん}のため満タンで離陸する余裕はなかったこともある

が、エンジンオイルの質がとことん悪く、量が少なく貴重な燃料も、品質が落ちてオクタン価が低いため、燃料の減り方も激しい。上は節約しろとは言うが、燃料を節約した挙げ句に墮^おとされては本末転倒^{ほんまつてんとう}、無理な相談だった。

「燃料と弾の補給、頼むぞ」

「ハッ」

若年^{じゃくねん}の整備兵に命じると、颯太^{そうた}は操縦席から降りた。四式戦^{よんしきせん}の周囲では、慌ただしく燃料の給油と弾の補給、簡単な点検が行われようとしている。

何せ四式戦^{よんしきせん}のエンジンは、最新型でパワーがあるのはいいとしても、いつ動かなくなっても文句は言えないという実に不安定なシロモノなのである。終わるまで多少の時間はかかりそうな具合だった。

最近は食料事情も悪くて食事也十分ではなく、さすがに全身ぐったりと疲労してしまっている颯太は、滑走路脇の草むらに寝そべって、少しでも身体を休めることにした。

風には潮の匂いがかすかにある。淡い青と深い蒼、白い雲が織りなす滑走路からの景色を、颯太は妙に気に入っていた。

——海に墜落しそうになったあの時。

小さい頃の、とても懐かしい声に助けられた。

颯太は思い出す。十二年前のとある夏の一日も、今日みたいな暑く、そして蒼と雲がきれいな日だったと思いいながら——



素子との夏

颯太は竹刀を肩に担いで、気分よく道場からの家路についていた。

いつも通り朝の激しい稽古をこなしてくたただったが、道場師範からその腕前の成長を褒められたからだだった。物事は上手くなることほど楽しいことはない。十四歳の颯太もその例外ではなかった。

夏休みのど真ん中なので、外はとことん暑い。前の日の夜に激しい夕立があったせいか、綿菓子みたいな雲がやや出ているものの、この季節にしては空の青も透き通っていた。

「今日は何買って食おうかな……」

目の前の角を曲がると、駄菓子屋がある。稽古のことははや忘

れ、颯太^{そうた}は駄菓子屋^{だかしや}で何を食べようかで頭がいっぱいになっていた。

「カキ氷は昨日食ったばかりだしなー、ソフトチョコにしようかな」

ぼやいているうちに駄菓子屋^{だかしや}の前へ到着。まだ何を買うかも決めていないうちに、すっかり顔見知りの駄菓子屋^{だかしや}のおばちゃんに声をかけられた。

「颯ちゃん^{そう}、今日も稽古^{けいこ}だったかね。頑張るねえ」

「あ、おばちゃんこんにちはー。今日は師範^{しはん}から褒め^ほられたんだぜ」

「あら、それはよかったねえ……今日は何買うんだい？」
駄菓子屋^{だかしや}のおばちゃんは、にこにこしながら聞いてくる。

「んー、じゃあ今日はソフトチョコに」

颯太^{そうた}が代金を懐^{ふところ}のがま口から出しておばちゃんに渡し、ソフトチョコを手を取った刹那。

「ちょっと、何をするのですか！」

女子とおぼしき悲鳴が聞こえてきた。

「ええ!？」

思わず左手のソフトチョコをまじまじ見つめる颯太^{そうた}。

「そんなわけないから颯ちゃん^{そう}。

どうやら、角の向こうあたりかね。物盗^{もの}りかねえ……」

治安維持^{ちあんじ}法^{ほう}なるものができてから、世間の雰囲気も殺伐としつ

つある。しかし夏の昼前、白昼堂々^{はくちゅうどうどう}と物盗^{もの}りとは、よほどの物好

きか、それともよほど腕に自信があるのか。

「ちょっと見てくる。おばちゃん警察呼んで」

颯太^{そうた}はソフトチョコを懐にしまい、荷物から竹刀^{しな}だけを持つと

残りの荷物は駄菓子屋に置いたまま、悲鳴がしたほうへと駆け出していた。

15
違いなさそうだ。

角を曲がると、この暑い季節に長袖などを着た男が、颯太と同じ年齢と思しき女子の両肩を取り押さえるように捕まえて、右手に持った風呂敷包みを奪い取ろうとしていた。確かに物盗りで間

「おいこら、何してんだよ！ 警察呼ぶぞ！」

颯太は威勢よく啖呵を切ると、竹刀を竹刀袋からさっと出して星眼に構え、慎重に相手との間合いを詰める。体格は同年代の中ではかなり大きい颯太は、線こそやや細いが、大人の男にも大きく体格で劣ってはいない。徴兵検査を受けたらしっかり甲種合格だろう。

「た、助けてえ！」

「ちっ、小僧^{こぞう}。邪魔立てするようなら容赦^{ようしゃ}はせんぞ。今なら何もなかったことにしてやるから、貴様も何も見なかったことにしておとなしく立ち去れ。あと、警察は呼んでも無駄だ」

男のうち一人が、颯太^{そうた}に向き直ってふてぶてしく言い放つ。

「何だよ、物盗^{ものと}り風情^{ふぜい}が偉そうに！ 叩きのめして警察に突き出してやる」

最後の方の台詞^{せりふ}はハツタリと決めつけた颯太^{そうた}は、星眼^{せいがん}の構えから一気に踏み込むと、目にも止まらぬ速さで一気に男へ竹刀^{しなたい}を打ち込んだ！

「ぐわっ」

一撃の後で間髪^{かんはつ}いれずに、相手に反応させる間もなく腕へ次の一撃を加える。

「痛ッ！ おのれ」

反撃を見せようとした男は、腰から短刀を抜くと、第三撃を加えようとした颯太の竹刀を受け止めた。

「げっ、刃物かよ」

「このガキめ！」

組太刀で使う木刀なら一撃で致命傷を与えられるのだが、竹刀ではやはり一撃で行動不能の致命傷というわけにはいかない。男は痛みを堪えつつ短刀を構えながら、剣先を動かして隙を見計らっている颯太との間合いを、徐々に詰める。

「このっ」

男が短刀を突き出す。しかし、颯太の竹刀が一瞬軽く動いたかと思うと、短刀はすりと軌道を変えられたかのように払われ、そのまま颯太の竹刀が綺麗に男の面へと入った！

ばしんっ

「ぐわっ！」

ものの見事にカウンター同然で入っては、ひとたまりもない。

男は短刀^{たんとう}を取り落とし、頭を抱えもんどりを打って倒れる。

「ふうっ」

颯太^{そうた}は安堵^{あんど}したように息を吐き出す。組太刀^{くみた}では十分に稽古を

18
積んでいても、短刀^{たんとう}とはいえ真剣勝負で切り落としを遣^{つか}ったのは

初めてだった。

「は、早く逃げましょう」

女性の声に、颯太^{そうた}はハッと我に返る。男は今は痛そうに倒れているが、また立ち上がってくるのにそう長い時間はかからないだろう。

倒れている女性は何とか立ち上がり、反対の手で足元に落ちて

いた風呂敷包みを掴み上げた。

「とりあえず人目のつくところへ出よう」

颯太は女性の手を引くと、幾つかの角を早足で曲がり、大通りへと出る。

大通りは暑いながらも、歩行者や道を走る自転車はそれなりに多く、黒煙を吐き出しながらバスやタクシーも走っている。暴漢が襲ってくる心配は少ないだろう。

二人は大通りを少し歩いたところにあるミルクホールへと入り、通りからはやや死角になる席を取り、安っぽい木の丸椅子にそれぞれ座る。

銀座などのミルクホールには、大人のカフェーのように煌びやかな店構えもあったが、もともとは学生など向けの軽食店。二人が入ったミルクホールは、食堂に駄菓子屋がくっついて毛が生え

たような、いかにも庶民的な店構えだった。

幸い他のお客はいなかった。とりあえず颯太そうたは二人分の冷たい牛乳とシベリヤを注文する。

「あ、危ないところをありがとうございました」

女性は颯太そうたに頭を下げる。やや線が細い印象だが健康的な身体からだを、水色地の夏着物に紺色の帯というこの季節らしい服装に包み、後ろで軽く結ゆった黒髪が印象的な少女だった。

「こ、コホン。き、気にしないで結構けいこうっ。あんな暴漢ぼうかん、一刀流いっとうりゅうを稽古けいこしている俺の敵ではありませんっ」

やや顔を赤らめて、たどたどしい話し方の颯太そうたを見ながら、ミルクホールの女将おかみさんは二人分の冷たい牛乳とシベリヤを置いてゆく。堪こらえてはいたが、目元と口元が面白いものを見るように笑っているのが丸わかりだった。

「まあ、変わったお菓子」

女性はシベリヤをまじまじと見て目を丸くする。その様子に颯^{そう}太^たの方が少し驚く。

「え、まさかシベリヤ知らないの？」

颯^{そう}太^たは冷えた牛乳を一口飲み、安カステラに羊羹^{ようかん}を挟んだ庶民的スイーツの王様をぱくつき始める。

「亜米利加^{アメリカ}にはないお菓子ですもの……シベリヤと言うのね、うん、おいしいわ」

女性はおそろおそろシベリヤを食し、満足げな表情を見せた。

「えーっと、まさか亜米利加^{アメリカ}人？」

「亜米利加^{アメリカ}在住よ、二世ってやつね。日本には両親の一時帰国についてきたの……申し遅れたわ、私は佐久原^{さくはら}素子^{もとこ}。あなたは？」

素子^{もとこ}と名乗った女性は口元を白いハンカチでぬぐう。

「あ、ああ、颯太^{そうた}。桑山颯太^{くわやまそうた}」

「ソータさんね。じゃあそう呼ぶから、私はモトコでいいわ」

素子^{もとこ}はあっという間にシベリヤと牛乳を平らげると、風呂敷包みをテーブルの上に置いて溜息^{ためいき}をついた。

「ソータさん、助けていただいたお礼は、改めてご自宅へお伺いしてさせていただけますけど、とりあえず私はこの風呂敷包みを、嵯峨^{さが}様のお屋敷に届けないといけないから」

そう言いながら女将^{おかみ}さんを呼んだ素子^{もとこ}は財布^{さいふ}を取り出し、二人分の牛乳とシベリヤ代を手際よく支払う。

「あ、シベリヤ代は自分で」

「いいのよ、迷惑かけてしまったのはこちらなのだから……そういえばソータさん、ご自宅はどちらかしら？」

素子^{もとこ}は静かに立ち上がりながら颯太^{そうた}に聞く。

「そんなにここから離れてはいないけど……それより、その嵯峨様という人の屋敷まではお供しましょう……また暴漢が待ち伏せしていても危ないし。」

また来たら、俺が返り討ちにしてちゃんと素子さんを守ってやりますよ。『女の子は大事にしろ』が師範の教えですし、日本に不慣れだとなおさらでしょう」

「まあ……」

颯太の言葉を聞いて素子はわずかに顔を赤らめながら、頭を軽く下げたのだった。

淡い青と白い入道雲が広がった空のもと、蟬の声に包まれたいかにも真夏らしい路地を、しかし二人は一言もしゃべらずに並んで歩いていた。

「あの……」

颯太^{そうた}は暑さにも耐えかねたのか、さすがに気まずいような気がして、おそろおそろ素子^{もとこ}に声をかけてみる。

「俺、何か失礼なことしました？」

問われて素子^{もとこ}は少し顔をうつむく。

「いえ、そういうわけでは……私、殿方^{とのがた}と街を並んで歩くのはほとんど初めてで……公衆の面前^{めんぜん}にこうまじまじ見られながらはちょっと」

風呂敷包みを両手で持ったまま、歩調を緩めずに、しかし楚々^{そそ}と歩く素子^{もとこ}。

「亜米利加^{アメリカ}で私の属するコミュニティーは、同年代の日本人の男性はいなかったの……」

「へえ、集落に男子がいなくていうのも珍しいですね。まあ俺

も中学は女子いませんし、尋常小じんじょうしょうのときも女子には人気なくてからっきしでしたからねー、不慣れなのはお互い様ということでしょうハッハッハッ」

颯太そうたは視線をあさってに向けながら、後半が半分棒読みの台詞せりふをのたまう。剣術けんじゅつバカというわけではないが、小さい頃から稽古けいこに明け暮れていた颯太そうたも、女子を横に街を歩くのは初めてだった。

最初は気に止める余裕もなかったのだが、ちらちらと横目で素子もとこをよく見てみると、近所の女学校じょがっこうの無駄はなに華やかな女子連中よりも、顔全体の彫りがやや深めな印象で、実はかなりの美人だったことに颯太そうたは気づく。

着痩せきやせしているせいかやや線は細いが、それでも身体の凹凸おうとつはきっちりと出ていて、夏着物の下の姿を思わず想像してしまうほどだった。一言でいうと青少年には目に毒なほどの美少女といえ

るわけで、青少年真っ盛りの颯太は、意識すると歩数を重ねるごとに緊張度を増してしまう。呼吸が乱れないようにするのに精一杯だった。

「ソータさんは、小さい頃から剣道を？」

「はい、剣道というより古流剣術こりゅうけんじゅつですが、祖父に連れられて四歳からずっと。師範しはんによると祖父はすごい使い手だったそうですけど、俺はまだまだ……」

素子もとこが慣れた話題を振ってくれたおかげで、颯太そうたは話しながら徐々に心の平静を取り戻すことができた。

「まあ、四歳から。それで、先ほどのお姿もかっこよかったわけですね」

素子もとこは颯太そうたの方をまじまじと見る。

「は、はあ……ありがとうございます」

颯太^{そうた}は視線を合わせずに、顔をやや赤面^{せきめん}させてうつむいてしま
う。強いと言われるのではなく、かっこいいと言われるのは颯太^{そうた}も
生まれて初めてだった。

「しかし仕方がないことだったとはいえ、剣士として試合以外で
剣^{ひとさま}を人様相手に振るうのは本来恥ずべきことですから、かっこい
いものではないと思います」

颯太^{そうた}は少し声を強めて素子^{もとこ}に向き直る。しかし素子^{もとこ}は、颯太^{そうた}の
瞳を真っ直ぐ見つめ返して毅然と告げた。

「いいえ、暴漢^{ぼうかん}に剣を振るったことではありません。正しきこと
をしようとしたその行い입니다。ソータさん、あなたはとても素
敵な男の子だと思うわ」

大通りから幾つか角を曲がり、人通りもまばらな細い路地に入

る。素子^{もとこ}によるとどうやら嵯峨^{さか}様のお屋敷とやらはもうそろそろ
らしかった。

「ほら、あの壁に囲まれた家がそうですよ。訪れるのは五年ぶり
ですけど」

素子^{もとこ}が指さした先には、古そうな板塀^{いたべい}に囲まれた、敷地の大き
そうな屋敷があった。どうやら華族^{かぞく}か何かの家なのだろう。

素子^{もとこ}は亜米利加^{アメリカ}でもそれなりの名士^{めいし}の家の娘なのかな……な
どと颯太^{そうた}が考えていた矢先、その鍛えられた感覚は、颯太^{そうた}にただ
ならぬ殺気を感じさせた。

「ソータさん」

「分かってる。素子^{もとこ}は後ろに下がっていて」

颯太^{そうた}はゆっくりと竹刀袋^{しなひ}から竹刀^{しなひ}を抜き、もたれていた板塀^{いたべい}か
ら身を起こした、洋ズボンに白いワイシャツを着て、木刀^{ぼくとう}を下げ

た男を睨めつける。

先刻素子を襲っていた暴漢ではない。体格は一回り大きく、そもそも動きに微塵の隙もない。一言で言えば、格が違う雰囲気だった。

「小僧とその娘さんに怨みはないが、先刻知人から泣きついて頼まれたものはやむを得ん仕儀のため、この暑い中待たせてもらった……その風呂敷包みかな？ 中身はよく知らぬが、おとなしく渡してもらえると助かるのだが、如何か？」

男は進み出て冷たく言い放つ。昼から冷酒でも引っかけてきたのか、顔がほのかに赤く、息は酒臭いのが少し離れていても分かる。

「断る。いい大人が昼酒飲んで、さらりと強盗紛いのこととして恥ずかしくないのかよ」

颯太は竹刀を星眼に構えるが、暑さによる汗ではなく冷や汗が背中を伝う。剣士であるが故に分かる。この男は恐ろしく強い。

「フン、子どもの剣道形など話にもならぬ……ん？」

鵲鴿の尾のように剣先を巧みに動かしながら、じわりと間合いを詰める颯太に対し、男は急に酔いから覚めていくような様子になり、数歩後ろに下がる。

「小僧、遣うのは剣道形ではなく古流か、感心だな。なるほど、酔い覚ましには丁度良さそうだ」

男は手にした木刀を、やはり青眼に構える。眼光鋭く、全身から闘気が噴き上がったような錯覚を颯太は覚える。

「神道無念流、羽島順次郎。身分は訳あって明かせぬが容赦せよ。」

小僧、貴様は？」

「く、桑山颯太、一刀流だっ」

「ほう、いい構えだ。北辰ほくしんか。となると道場も師範しはんも限られるが……まあ、無駄な詮索せんさくはすまい。北辰ほくしんなら後で皇道義会こうどうぎかいにでも寄って聞けばいいことだからな」

二人の剣士がじわりと慎重に間合いを詰めてゆくのを、素子もとこは後ろで固唾かたずを飲んで様子を見守る。

先に屋敷へ行って助けを求めた方がいいのは、素子もとこも頭で分かっているのだが、直感的に羽島はしまと名乗った男がそれを見逃してくれるとは、どうしても思えなかったのだ。

「たっ！」

パシインッ！

先に颯太そうたの方が竹刀しなひを鋭く打ち込むが、颯太そうた渾身の一撃は、しかし羽島はしまの木刀ぼくとうに難なく受け払われる。

「てやっ」

羽島^{はしま}が今度は木刀^{ぼくとう}を返して、上段から颯太^{そうた}に打ち込もうとする。

——来たっ！

颯太^{そうた}は反射的に横へ受け止め……ようとはせず、そのまま木刀^{ぼくとう}のしのぎを削るようにして竹刀^{しな}を繰り出す。一刀流^{いっとうりゅう}剣術^{けんじゆつ}の極意^{ごくい}ともいうべき、相手の太刀のしのぎを削りながら軌道をそらせ、そのまま相手へと打ち込む一種のカウンター技、切り落としの太刀筋だ。

「ぬっ……！」

羽島^{はしま}は少し驚いた様子を見せると、大きく体を横に裁きながら、腕力の差で跳ね上げて難を逃れる。

「驚いたな。一刀流^{いっとうりゅう}の極意^{ごくい}といわれる切り落としをその歳で……軟弱に竹刀^{しな}をたしなむ連中とは違い、かなり真面目に修練^{しゆれん}を積んだようだな。大したものだ」

羽島はしまは何事もなかったかのように、再び木刀ぼくとうを構える。颯太そうたは明らかに動揺した様子ながらも竹刀しなたいを構える。

「しかし、鞘さやの内うちにて悟り決するのが剣の極意ごくい。技量が上と分かる相手に敢えて剣を向けるのは愚ぐの骨頂こつちよう……まだまだ未熟だな小僧こぞう」

羽島はしまはさらに間合いを詰め、颯太そうたは無意識的に間合いを外そうと後ろに下がる。とっておきの切り落としの技だったが、まさか簡単にいなされるとは思ってもいなかった。体格差や体裁たいさばきだけではなく、撃剣げきけんの鋭さもまるで違う。他流を見るのは初めてだが、それにしても強いなどという生易なまやさしい次元を超えている。道場の師範しはんと同等か下手へたするとそれ以上の遣い手だ。

「てやっ！」

羽島はしまは裂帛れっぱくの気合いとともに、颯太そうたの小手に木刀ぼくとうを振り下ろす。

「うっ……」

颯太そうたは諦めずに再び切り落としを試みようとするが……しかし羽島はしまが本気で打ち込んだ撃剣げきけんの鋭さは、颯太そうたの想像を遙かに超えていた。

ばぐっ！

鈍い打撲音だぶくが、素子もとこには確かに聞こえたような気がした。

「うっ……ぐわああああっ！　　いってええええッ！」

竹刀しなひを地面に取り落とし、颯太そうたは打ち込まれた右手を左手で押さえ、うずくまり、痛みを耐えかねて思わず大声を上げる。

羽島はしまはゆっくりと木刀ぼくとうを上段に構えたと思った瞬間、素子もとこは何も考えずに前へ駆けていた。

「も、もうやめてください！」

青ざめた表情で駆けてきた素子もとこは、右手を押さえ、うずくまっ

ている颯太の背中に覆い被さるように庇う。

木刀の空気を切り裂く音が、素子の耳にははっきりと聞こえた気がした。

ビュッ！

襲って来るであろう自らを死へと誘う激痛に、目を閉じて歯を食いしばった素子だが……木刀は、素子の髪に触れるか触れないかの空間でピタリと静止していた。

「縁者でもない行きずりの小僧であろう？　そこまで庇うのは見上げたものだが……」

おそるおそる目を開けて、木刀を静止させたままの羽島を見上げる素子。羽島の表情は驚き呆れているようだった。

「私が手に持つ風呂敷包みたったひとつのために、命のやりとりなど馬鹿げているとは思いませんか……このような風呂

敷包みなら差し上げますから、木刀^{ぼくとう}をお引き下さい」

素子^{もとこ}は泣きながら、ゆっくりと風呂敷包みを地面に置く。

「安心しろ娘さん、既に勝負はついた」

羽島^{はしま}は木刀^{ぼくとう}を引いて構えを解く。

「俺の負けだ、娘さん。」

未熟な腕の者なら、先ほどの一撃を寸時^{すんじ}に止めることはできぬ故^{ゆえ}、娘さんの命はなかったであろう……そこまで命を賭ける度胸^{どきょう}は大したものだ。

そして、物取り目的で剣の立ち会いなど馬鹿げているのも道理。無念流には『武^ぶは戈^{ほこ}を止^やむるの義^ぎなれば、少しも争う心あるべからず』という教えがあるのを思い出させてくれた娘さんの勝ちだよ」

——声がしたのは、あっちのほうですよ。

苦笑していた羽島と、颯太を庇ったまま離れようとしない素子の耳には、男の声と地面を蹴る靴音が近づいてきていた。

「ちっ、小僧の叫び声を聞きつけて巡査が来たか……めんどくさいことになりそうだなおい」

羽島は心底うんざりした様子でぼやく。

「娘さん、俺が時間を稼いでいるうちに、早く小僧を連れて立ち去れ。小僧の腕の骨は折れてはいないはずだ……そして小僧、いや桑山颯太。鞘の内を悟れぬ蛮勇が故に、娘さんを命の危機に遭わせたことを忘れるな。さらに修練に励め」

木刀を両肩に担ぐようにして、羽島は巡査の声の方へと歩を進めていった。

「警察だ……ってお前か羽島。非番の日に呑んだくれるのは止めたらどうだ。また喧嘩沙汰起こすと今度こそ飛ばされちまうぞ」

駆けつけた巡査じゅんさの男は、羽島はしまの顔を見るとうんざりしたように文句を言う。どうやら羽島はしまも巡査じゅんさであり、そして駆けつけた巡査じゅんさも羽島はしまの同僚のひとりらしかった。

「おう、すまんすまん。あまりに暑いから冷酒ひやを引っかけすぎたらしい」

「ったく……そういえば、近くを巡回していたら男の悲鳴が聞こえたから来てみたんだが、その木刀ぼくとう、まさかまた喧嘩けんか沙汰さたじゃないだろうな？」

巡査じゅんさの男は、羽島はしまの後ろを覗くように見るが、特に人影は見当たらない。

「さあ、俺もだいぶ酔ってたからな……日頃の愚痴とか奇声のひとつでも上げたかもしれんな」

あさっての方角をチラリと見ながら涼しい顔で応こたえる羽島はしまに、

巡査^{じゅんさ}の男はいよいよ呆れを通り越したような顔つきになる。

「愚痴のひとつでも言いたいののはこっちの方だ……まったく、やってられんほど暑いのに余計な手間かけさせるんじゃないよ」
「いやすまんすまん、今度一杯オゴるから勘弁しといてくれよ、な」

羽島^{はしま}は巡査^{じゅんさ}の男の肩を気安く叩きながら連れて、嵯峨^{さあが}家の邸宅から反対方向へと足を向けて歩いて行く。

——うまく逃げたようだな、娘さん。達者でな。

後ろから二人の気配が消えたことを背中を感じながら、羽島^{はしま}は心の内でつぶやいた。

騒動から七日後。

淡い青と深い蒼、白い雲が織りなす景色のもと、大型客船が出

港を控えて慌ただしい様子を見せているのを遠目に、颯太と素子は港近くの公園のベンチに並んで座っていた。

「もう亜米利加に帰るのか、あっという間だったな」

嵯峨家へ風呂敷包みを届けた二人は、嵯峨家の家人に送られて無事に帰宅することができた。颯太の家へ、素子が謝礼を持って挨拶に来たのはその翌日のことだった。

結局、風呂敷包みの中身は分からずじまいに終わった。子どもが知っても益のないシロモノだったのだろう、と後になって素子は親から聞かされ、諦めて深く詮索はしなかったのだ。

颯太の怪我は骨折こそしていなかったものの、重度の打撲傷のためしばらく稽古はお休み。その間に素子や、娘の命の恩人扱いでやたら気に入られた素子の両親に連れられるような形で、夏祭りや花火など連日あちこちに出かけて遊び倒していたが、楽しい

ひとときはすぐに過ぎ、素子^{もとこ}たちが亜米利加^{アメリカ}へ帰国する日がついにやってきた。

「ええ、本当に……」

素子^{もとこ}は感慨深そうにつぶやくと、そのまま俯^{うつむ}いて押し黙り……。そして、声を立てて泣き始めてしまった。

「ソータさんが、あのときもし死んでしまったらどうしようと思うと、今でも怖くて」

ハンカチを取り出して目元を拭いながら、素子^{もとこ}は涙声を絞り出す。

颯太^{そうた}は大泣きする素子^{もとこ}を見て、どのような声をかけるべきなのか分からなかった。しかし自分のことを案じて泣いてくれることに、心臓の芯が暖かくも痛くなるような、不思議な感覚に包まれていた。

「本当に出会えてよかったわ、ソータさん……亜米利加へ戻った
ら手紙を書きますね」

涙ながらに言葉を続ける素子^{もとこ}の手を、颯太^{そうた}はそっと握ることし
かできなかった。



蒼と雲の彼方で

幾つもの戦闘機が織りなす轟音は、変わらずに遠くから聞こえてくる。どうやら今日の敵さんは少々しつこいようである。

颯太は草むらに寝転がったまま、飛行服の胸ポケットから一枚のカラー写真を取り出した。

写真には、桃色地で装飾があるブラウスに、クリーム色のロングスカートを穿いた女性が立ち姿で佇んでいる。颯太が知っている生身の素子よりも、背が伸びて大人びた姿だ。

亜米利加に帰国した素子から、四年後に手紙と一緒に送られてきた写真だった。カラー写真というのが、いかにも亜米利加らしいなと颯太は思ったのを覚えている。素子とは数十通の手紙のやりとりをしたが、戦争が始まると郵便も不通になったため、それ

つきりになってしまっていた。

「どうしてるのかな……」

写真の中にいる素子^{もとこ}は、笑顔のまま答えない。亜米利加^{アメリカ}では素子^{もとこ}も敵国人だろうから、帝国国内での敵国人への眉^{まゆ}をひそめるような仕打ちを見聞する限り、素子^{もとこ}も亜米利加^{アメリカ}でよほどひどい仕打ちを受けているのではと思うとやりきれなくなる。

——ソータさん、あなたはとても素敵な男の子だと思うわ。

「素子^{もとこ}も素敵な女の子だと思うよ。本当に出会えてよかった」

颯太^{そうた}は写真を再び胸ポケットにしまうと、草むらからヒョイと立ち上がり、引き締まった表情で補給を終えた四式戦^{よんしきせん}へと歩を進めた。あとは敵機を一機でも多く叩き落としてやるだけだ。

「燃料と弾薬の補給、終わりました」

「ご苦労」

颯太は再び四式戦の操縦席に身を沈め、エンジンを始動させる。二千馬力のエンジンが唸りを上げ、四翅のプロペラが力強く回り……と思った矢先、エンジンが急に力なく停止して、颯太は目を丸くする。

「何があった!? 尋常の止まり方じゃないぞ!」

風防を一気にスライドさせて開き、颯太は四式戦から飛び降りると、少年整備兵に語気鋭く問い詰める。

少年整備兵は言葉を詰まらせたまま答えない。すると、少年整備兵に表情はみるみる崩れてゆく。

「軍曹殿がもし死んでしまったらどうしようと思い、軍曹殿の機体には、燃料ではなく水を入れました……軍曹殿に私は死んでほしくありません」

少年整備兵はそのまま泣き崩れてしまった。周囲の数人の少年

整備兵もやはり泣いている。そこまで泣かれてしまうと、颯太もはや何も言い出せなかった。

「……臣民の衷情も、朕よくこれを知るしかれども、朕は時運のおもむく所、堪へ難きを堪へ、忍び難きを忍び、以て萬世のために太平を開かんと欲す……」

翌日の正午。

詔書が正午に放送されるというラジオニュースを聞いて、士官、下士官、整備兵など飛行場にいる全員が食堂に集合し、おんぼろな真空管ラジオの前に集まっていた。

真空管ラジオから流れるノイズ混じりのニュースと詔書を、直立不動のまま聞いていた颯太は、とりあえず帝国が亜米利加に降伏したらしいということは理解することができた。

嗚咽おえつが漏れる食堂からひとり外に出た颯太そうたは、ふらふらとした足取りで滑走路脇かつそうろわきの草むらまでたどり着くと、力なくペタンと座り込み、淡い青と深い蒼、白い雲が織りなす景色を呆然ぼうぜんと見つめていた。

——どうしようかな、これから。

緊張の糸が切れて呆然ぼうぜんとした思考の中、颯太そうたはふと頭をよぎった言葉がそれだった。とりあえず空戦をすることはもうないだろうから、即死と隣り合わせの日常から解放されたことには違いなかった。

深い……深い安堵感あんどかんに全身の隅々まで包まれた颯太そうたは、草むらの上に寝転がり、しばらく何も考えずに空を見ていた。不思議と戦争に負けたという悔しさはなかった。

——鞘さやの内うちを悟れぬ蛮勇ばんゆうが故ゆえに、娘さんを命の危機に遭わせた

ことを忘れるな。

「鞘さやの内うちの勝ちこそ、剣士にとって最上さいじょうの勝ちである……帝国の鞘さやの内うちを悟れぬ蛮勇ばんゆうが故ゆえに、国敗くにやぶれ民と戦友の命は空に消えたか……剣の道理そのものだな」

羽島はしまの言葉を思い出しながら紡つむいだ颯太そうたの言葉は、日本人や亜米利加人をはじめ、数えるのも気が遠くなるほど無数の命と、その命が繋ぐはずだった未来の命をも飲み込んだ、白々しいほど淡い青へと吸い込まれるようにして消えた。

ふと、素子もとこのことが気になった。というより無性に逢いたくなつた。死を覚悟しながら思いかけず命を繋いだのを噛みしめたことから起きる、生物の帰巢本能のようなものなのだろうが、そんなことは颯太そうたには分らない。

「そうか、もう戦争は終わったんだから、自由に行けるかもな……」

：亜米利加」

颯太はそうつぶやくと、意を決したように力強く立ち上がる。颯太は行くと決めた。あの蒼と雲の彼方で、素子に再び逢うために

（蒼と雲の彼方で 完）

敢えて言うなら新装版のあとがきっぽい

初めての方ははじめまして、そうでない方はご無沙汰しております。今回は二〇一五年の新作として、コミックマーケット八八にて発表の創作短編ライトノベル『蒼と雲の彼方で』の、若干の加筆修正ならびに表紙イラストを一新した新装版をお送りします。

二〇一五年は、十五年戦争の終戦から七〇年。それを期して執筆した、昭和初期が舞台のバトル系ライトノベルです。未熟な点もあるかと存じますが、手に取っていただいて嬉しく思います。新装版にあたり素敵な表紙イラストを描いて下さった、まっち氏には謹んでお礼申し上げます。また空戦や整備兵を巡る描写は、北辰一刀流五世の故・小西重治郎氏の体験談を参考にさせていだきました。合掌。

このお話の後、颯太と素子は無事に逢えたのだろうか、という感想をいただいたりしました。大変嬉しくお礼申し上げます。執筆当初からの方針で、その部分は読者の方の想像にお任せしようと思っています。とりあえず、仮に続きを書くというのなら、作者は「二人は逢えませんでした」というストーリーを書くことはできなさそうだなとは思っています。

微力ながら本作を以て、終戦七〇年を迎えるに当たっての、未来へと遺す作者からのメッセージに代えさせていただきます。

二〇一五年一月一日 悠川 白水

参考文献：小畑雄二「小西重治郎インタビュー」（学習研究社『歴史群像』七二、二〇〇五年 所収）

蒼と雲の彼方で

(電子書籍版)

はるかわ はくすい
悠川 白水

平成 27 年 11 月 17 日 紙本版発行
平成 28 年 3 月 15 日 電子版発行
平成 29 年 1 月 10 日 電子版改訂

著者・発行人 悠川 白水
表紙イラスト まっち
発行サークル・電子化 白水の小説棚

著者 Twitter : @haruhaku
絵師 PixivID : 701181

※ この作品はフィクションです。実在の人物や団体・兵器と実際の出来事などとは一切関係がありません。

©2015-2017 Hakusui Harukawa (illust Match) All Right Reserved